

せている。

左千夫が反発したのは、俳人側のこうした考え方であったと考えられる。彼は「写生文論」において

今日の写生文専門家と目さるゝ諸子は、皆俳人側の人である、従て作る文章は俳句に近いものが多い、為に作者自身も写生文は最も俳句に親しいものである様に言ひ、世間からも、写生文は俳趣味に偏したもので一種特別の文章かのように言はれて居るが、予は写生文研究者の一人として、写生文俳句親類論には大反対である。子規子も写生文は俳句の親類ぢやとは、決して云はなかつたと記憶する。

と述べて彼らの見解に反対し、短歌趣味とか俳句趣味とかいうことを離れて、自分が見聞したことを平易な口語で具象的に描くことによつて筆者の感興を読者に正確に伝えるのが写生文の目標であると主張している。右の「写生文論」の中で彼は自身について、「子規子の時代より絶えず研究の席末に列し窃に将来に期するところある」云々といったことばを見せているが、そうした左千夫の写生文観は、この論に至つて一つの体系をなすに至つたと見ることができる。

以上述べてきたことは、左千夫は子規が選をする「ホトトギス」に投稿することから写生文の執筆を始めるが、間もなく彼の主宰する写生文の研究会「山会」にはいり、写生方法によつて自身の体験を表現する技術を身につける。「山会」は子規なきあとも虚子や四方太を中心にして続けられ、そこに出席し研究を続けた左千夫は「千本松原」のような「ホトトギス」の巻頭を飾る写生文や、写生文から発展して「野菊の墓」のように好評を博する小説に至りつたということになる。

このように左千夫の写生文の執筆は「ホトトギス」派の俳人たちによる「山会」と深くかわるのであるが、彼らの行き方に対峙する姿勢を徐々に強めながら左千夫的な写生文の世界を自覚してゆくことになるのである。

「野菊の墓」が「山会」に出されてから、「ホトトギス」掲載、単行本出版と着々と進んでいったのは、「山会」の仲間、中でもその中心で「ホトトギス」の編集者であった虚子の並みならぬ配慮があったからであると思われる。

このように「野菊の墓」が世に出るについては、虚子をはじめとする「山会」の人々の好意的な評価と配慮の恩恵をこうむっているのであるが、それにもかかわらず左千夫は明治三十九年十二月二十二日付の岡田撫琴宛の書簡に

三河のホトトギス評適評と存候趣味も理想も低い写生文には困り候坂本君と文章ニ就て往々考か違ひ候

と書き、明治四十年の七月、雑誌「趣味」に発表した「写生文論」では

かういふては余り仰山で且つ不遜に渡るの恐れがあるけれど、写生研究者を以て自ら任ずる予の考にも、中央諸家のこれまでの写生文中にはこれではどうかと思はれるのが多いのである。従て其議論にも一々同意が出来ない。

と述べて、虚子や四方太らが中心となっている「山会」の写生文の行き方に強い反発を示している。

ここで左千夫が俳人たちの写生文観のどのような点に反発したのかについて考察してみたい。

まず坂本四方太について見てみると、彼は「ホトトギス」十巻三号（明39・12）発表した「文話三則」で「俳句は非人情の旗頭である」と述べたあとで、

写生文は俳句と同じには言へぬが、大体俳句趣味を以て支配され

る以上どうしても非人情でなくてはならぬ。写生文が小説や芝居と区別せらるゝ点は一は此人情非人情から来る。

と言って、写生文が俳句趣味の上に立って「非人情」で、人間の喜怒哀楽をも花や雲のように天然現象と同一視するものであることを説いている。同じ趣旨の主張は「ホトトギス」十巻九号（明40・6）の「写生文の迫害」にも見られ、四方太はここで、世上に写生文を攻撃して「俳句臭味を帯びたイヤに気取つたものである」と言う者がいるが、こうしたことを言う者には俳句の価値から説明してかからねばならぬ、「俳句は形こそ短けれ最も高遠なる趣味を有して居て、我邦特有の文学と自負し得ることは最早動かすべからざる事実である。」と俳趣味に無条件に価値を置き、写生文も俳句に近づくべきであるという考え方を見せている。

こうした写生文と俳句とを密着させる考え方は、四方太と共に「山会」の中心であった虚子にも明瞭に認められ、たとえば「国民新聞」に連載された「俳諧一口噺」の中で、

俳句を作つた事のない人の写生文はどうしても俳趣味が乏しい。其為め写生文としての価値も少ないやうに思はれる。（俳句と写生文（二）明39・10・25）

俳句及び写生文を作る情の状態は微温的だ。而して其結果は写生だ。微温的情緒動いて山川草木から人間の景色に近い動作感情を補へて句を作る。（俳句と写生文（五）明39・10・28）

といった発言をしている。

いま見てきた四方太と虚子の発言は、写生文を、人間的関心を抜きにして、人事をも自然と同様に唯美的にとらえるものと考え、共通しており、またその点で二人の見解は写生文を俳句に極めて密着さ

と述べているところから見ると、それは認めにくい。当時の左千夫にとって「写生文」を「山会」で通過させることは、それほどむずかしくなかったものかと思われる。

次に彼の写生文で「ホトトギス」に載るのは先に触れたように「千本松原」で、これは八巻八号（明38・5）の巻頭を占めた。このころの「ホトトギス」は、八巻四号（明38・1）に夏目漱石の「吾輩は猫である」が載るとこれが極めて好評で、そのため五号（明38・2）、七号（明38・4）と書き継がれ、発行部数が急上昇していた。そのような時期の「ホトトギス」の巻頭に「千本松原」が載ったことは、彼に写生文についての自信を持たせる大きな出来事で、この年の秋に彼が「野菊の墓」の執筆を思い立つのもこのことが関係していると思われる。「野菊の墓」執筆の動機としては、さらにもう一つ、漱石の「ホトトギス」に発表した小説「吾輩は猫である」の好評ということも考えられるが、いずれにしても左千夫の「野菊の墓」執筆には「山会」や「ホトトギス」が深くかかわっているということが言える。

その辺のところをもう少し詳しく眺めてみると、明治三十八年十一月九日付の寺田憲宛のがきで左千夫は「小生只今柄になき小説をかき居候出来候節ハ御慰みに進上可致候御笑被下度候」と述べており、こうして書いたところの「野菊の墓」の草稿を十一月の「山会」に出している。左千夫が自作を朗読しながら感きわまって泣いたというエピソードが虚子によって伝えられているのはこの日のことである。

ところがもう十二月一日発行の「ホトトギス」九巻三号の「消息」では、新年号の予告として「野菊の墓」について

其名の示す如き野趣に饒かなる可憐の小説にして或人がエノツク

アーデンの面影ありと推称せる程のものに候。

というように「ホトトギス」としては異例と思われるほどの持ち上げかたをしている。右の文中で、「野菊の墓」を「エノツクアーデン」にたとえた「或人」というのは誰であろうか。虚子は正元十一月の「ホトトギス」に載った「文章入門」の中で、彼が三高の学生であったころには小説家を志し、子規が「日本」に発表した俳論にはあまり関心を持たず、テニソンの「イノツクアーデン」やサッカーの「虚栄の市」に熱中したことを書いている。このことから考えると、「エノツクアーデン」の面影ありと推称したのは虚子自身かとも考えられる。いずれにしても、十一月九日の「山会」に出された「野菊の墓」について、十二月一日発行の「ホトトギス」誌上で新年号への掲載を異例とも見られるほどの賞賛のことばをもって予告しているのは、会での評判が良好であったことを示すものだろう。

こうして「野菊の墓」が「ホトトギス」九巻四号（明39・1）に載ると、「山会」の会員となっていた漱石は

只今ホトトギスを読みました。野菊の花は名品です。自然で、淡泊で、可哀想で、美しく、野趣があつて結構です。あんな小説なら何百篇よんでもよろしい。

という賞賛のことばを送る。当時すでに文壇に名声の高まっていた漱石から受けたこの賛辞は、この作品が一般にも好評であったこととあいまって、彼にそれからのち小説家として立つ決心をつけさせる上で大きな力があつたと考えられる。

「野菊の墓」の載った翌月の「ホトトギス」（九巻五号）には出版広告として「伊藤左千夫先生作 小説野菊の墓（近刊）」という予告が載り、四月五日には俳書堂から単行本として刊行される。このように、

卷十一号（明36・7）に載った「午前二時」である。これは先に同誌（明34・2）に発表した「牛舎の日記」と似た内容で、それ以上に牛舎での真夜中の乳搾りや、牛のお産のあわただしい様子をいきいきと描写している。この写生文が「ホトトギス」に掲載されているところを見ると「山会」を通過したものと見られるが、とすると、この「午前二時」は左千夫の写生文の中で子規なきあとと虚子や四方太らが中心となって運営されるに至った「山会」をパスして「ホトトギス」に載せられた最初の作品ということになる。

左千夫が「午前二時」を書いたころ、すなわち明治三十六年六月に根岸短歌会の機関誌「馬酔木」が創刊される。この雑誌は最初のころは三十二ページの薄っぺらなものであったが、写生文・小品のたぐいも掲載している。いま、創刊号から六号までを見てみると、

創刊号（明36・6）

蕨 真 山日記

香取秀真 吉高ゆき

二号（明36・7）

寒川鼠骨 大売出し

浪 雄 牛臥の一夜

さなへ（秀真） 黒白問答（課題「鳥」応募作品）

三号（明36・8）

写生文なし

四号（明38・9）

伊藤左千夫 画室

蕨 真 電

茅堂（左千夫） 一錢蒸瀝（課題「舟」応募作品）

さなへ 人のちから （ ）

ひくらし 野菊

さなへ 秋草花

五号（明36・10）

夏 木 栗毛虫

阿都志 秋風日記（課題「秋風」応募作品）

六号（明36・11）

鼠 骨 白萩村雑事

浪 雄 居合ぬき

澁 舟 ひな寺を訪ふ（課題「寺」応募作品）

坤為地生 寺 （ ）

石羊生 寺 （ ）

のように最初のころからかなり写生文にも力を注ぎ、彼自身も右に挙げた「画室」、「一錢蒸瀝」のほか、「天長節」（明36・12）、「井戸に関する記事」（明37・5）などの写生文を「馬酔木」に載せてゆく。

このように左千夫の写生文は、この時期もつばら「馬酔木」に載せられ、「ホトトギス」には「午前二時」（明36・7）のあとは、「千本松原」（明38・5）まで二年近くにわたって見られない。それは彼が「馬酔木」に力を入れるあまり「山会」への出席や作品提出を中止したのかとも思われるほどであるが、しかし坂本四方太が「アララギ」の「伊藤左千夫追悼号」（大2・11）で

吾々の組成してゐた文章会の席上に左千夫君を見出さぬことは殆なかつた。左千夫君は熱心な文章家で吾々仲間でも可成多量に創作した方である。

とは別に、根岸派の歌人たちの間に「心の花」を発表の場として写生文研究会を作ろうという気運が興っていたときに、その「心の花」に発表されたのである。

「やま会」は「心の花」六巻一号で予告したとおり明治三十六年一月十二日に森田義郎宅で発会を見るが、この第一回の「やま会」に左千夫が提出したのが「浅草詣」（「心の花」六巻二号 明36・2）であったと推定される。というのは、この写生文は

一月十一日、此日曜日に天気であれば屹度浅草へ連れて行くべく、四つたりの児供等と約束がしてあるので……

という書き出しで、一月十一日の日曜日に四人の娘を連れて浅草に参ることにしてあり、娘たちも朝から心はずませて着物を着せてもらっていたが、その中の一人が急に発熱して行けなくなったので、三人の娘たちが力を落とす様が描かれている。左千夫はこの日に子供を連れて浅草へ行き、その日の見聞を写生文にして翌日の「やま会」に出すつもりでいたが、子供の病気でそれができなくなったので、そのことを書いて提出し、十二日の会で「心の花」への掲載が決まったと考えられるのである。

この「やま会」はそれほど活動せず、発展も見ないで終わったが、その理由としては、一つには何と云っても「ホトトギス」系の「山会」が大きな存在で、「やま会」の主唱者である左千夫も秀真もやはり引続いて虚子や四方太を中心とする「山会」に出ており、左千夫らが全面的対立、独立という経過をとらなかつたこと、それともう一つ、ちょうどこのころから根岸派歌人の間に機関誌発刊の気運が高まり、彼らの熱意がそちらの方へ傾いていったことが関係していると考えら

れる。

そのころ、「ホトトギス」系の「山会」が明治三十六年四月十八日に左千夫の家で開かれている。それは四月十日付の蕨真宛左千夫書簡に十八日の山会（一は文章）は小生宅にて致す都合に相成候故成るべく山二つ（二は御馳走物）睦岡の早蕨など少し御持参被下候へ、尤も妙と存候

とあるところからわかり、また同月二十一日付の長塚節宛書簡によつて、その日の出席者が左千夫、麓、秀真、蕨真、鼠骨、虚子、碧梧桐の七人で、左千夫、鼠骨、虚子が写生文を一編ずつ提出し、当日出席はしなかつたが節が二編提出したことがわかる。

この節宛書簡の中で左千夫はこの日の「山会」に出した写生文について、「小生のはまづ（マズ）ひが此度のは鶴川へでも出さうかと存候。」と言っている。左千夫の書簡はその写生文の題名までは示していないが、時期から考えて「鶴川」一卷四号（明36・5）に載った「淮仏会」を指すものと推定される。

この「淮仏会」について左千夫は四月三十日付の塩谷華園（鶴平）宛書簡で

来月の鶴川へは歌詠の「ノロクサキ」写生文送り申候御一笑被下度文章にかけては迎ても俳人には及ひ不申慚愧の次第に候

と述べている。この写生文については節宛書簡も華園宛書簡も共に左千夫の低姿勢ぶりが目立つが、これは、この写生文が四月十八日に左千夫宅で開かれた「山会」で批判され、弱気になったものと見られる。

この「淮仏会」の次に左千夫が発表した写生文は「ホトトギス」六

課題である「松」の歌を作るため、明治三十四年九月四日、五日と駿河の興津へ一泊の旅をしたときのことを記した紀行文である。この時に作った歌について、森鷗外の書いた「伊藤左千夫年譜稿」(「アララギ 伊藤左千夫追悼号」大2・11)は

九月日本の募集課題「松」の歌を作り、駿河興津に遊ぶ。二日間に作る所の長短歌若干者ありしを、皆棄てらる。

と記している。鷗外の言うように子規が左千夫のこのときに作った「松」の歌を認めなかったことは、「仰臥漫録」の明治三十四年九月六日の条の

左千夫来ル 昨夜興津ヨリ来リシ也ト(中略)興津行ハ週報課題松ノ歌ヲ作りニ行キシ也ト(中略)余曰クソレワロシ、松トイフ題已ニ陳腐ナルニ殊ニ陳腐ナル興津ニ行クコト大間違ヒ也。ソレヨリモ知ラヌ野寺ノ庭ノ松カ兄ノ庭ノ松ヲ詠ミタル方マサリタラシ云々

という記述に明らかである。「仰臥漫録」が記するように左千夫の興津行きは明治三十四年九月四日から五日にかけてで、鷗外の「年譜稿」に三十三年のこととするのは誤りである。

このように左千夫が興津に遊んで作った「松」の歌は子規に大いに批判されたが、このときの歌が「心の花」四巻十号(明34・10)に「九月五日三穂の浦に遊びて詠める歌並に短歌三首」として載っている。ところが、その折のことを述べた文章の方は、それから一年たって、子規が死去したあと、明治三十五年十月に、同じく「心の花」五巻十号に発表された。これも、歌と同様に子規の認めるところとはならなかったと見られる。

「一夜旅」が「心の花」に発表された事情について考えてみると、

この雑誌は佐佐木信綱の主宰する竹柏会の機関誌であるが、「ひろく、ふかく、おのがじしに」という彼の方針や、竹柏会と根岸短歌会との新派同志であるという親近感によるのであろうか、「心の花」は、そのころまだ機関誌を持たなかった根岸派歌人たちに対しても門戸を開いており、根岸派から岡麓、香取秀真、森田義郎の三名が編集に加わっていた関係もあって、この派の歌人の投稿が多く、左千夫もたびたび歌や文章を載せている。

それともう一つ気づくことは、いま触れた香取秀真、森田義郎に左千夫も加わった三人が発起人となって、「ホトトギス」系の「山会」とは別に、歌人たちの間で写生文の研究会を作ろうとしたことである。この三人は連名で「心の花」五巻十一号(明35・11)に

美文を愛好する者相会して毎月一回写生文の創作批評をものする会を名づけて『やま会』といふ新春一月十一日を以て発会を挙行せんとす。同好の士来会を望む

という告示をしており、同誌六巻一号(明36・1)でも

やま会(写生文の研究会)は一月十二日神田美土代町大日本歌学会に於て午後四時より発会を挙ぐ

と予告している。「やま会」とひらがなにしたところに、子規の主宰した「山会」の精神を継承しつつも、俳人たちが中心となっている「ホトトギス」系のそれとは別の行き方をとろうとする彼らの意図が籠められているのであろう。「心の花」ではこの六巻一号からそれまでの課題文章にかわって「写生文」を募集することになり、それまで選者として名が掲げられていた石樽千亦の名が消えている。この号からは三人で選を行ない、「やま会」がその場になったものと思われる。「一夜旅」という写生文はいま見てきたように、「ホトトギス」系の「山会」

次の「山会」が三月七日に開かれたことは三月三日付の河東兼五郎宛子規書簡に「来る七日山会 山二つ御持参可有者也」とあることからわかる。そして、この日に左千夫が子規庵を訪れていることは、三月二十一日付の赤木格堂宛左千夫書簡で「今月は七日の日に根岸へ往たきり無沙汰をしてゐるから」云々と述べていることからわかるけれども、この日左千夫が「山会」に出たのか、それとも子規に会っただけで、夕刻から開かれた「山会」に出席せずに帰ったかは、右の格堂宛の書簡は言及しておらず不明である。

威 そのようなわけで、左千夫が三月七日の「山会」に出席し、その席で「根岸庵訪問の記」を披露したという可能性もなくはない。「アララギ」の「伊藤左千夫追悼号」誌上で四方太と鼠骨が一致して、子規がこの「根岸庵訪問の記」をほめたことを回想しているが、それがこの日のことであったということも考えられる。その場合、披露されたのが三月七日で、それが三月十二日発行の「俳星」（秋田県能代から石井露月が発行）に載っているという点で、時間的にやや無理があるように思われる。しかし、このころの俳誌や歌誌の中には、発行が予定より遅れても、雑誌には発行日をもとのまま印刷しておき、実際の発行日とは相当ずれがあるという事は、しばしばあった模様であるから、「俳星」も必ずしも雑誌に記載された発行日どおりに刊行されたとは限らない。「俳星」二巻一号に載った「根岸庵訪問の記」の原稿が、露月のもとに送られる前に三月七日の「山会」で発表されていたということもありえぬことではない。この辺の可能性も残っていることを記しておきたい。

貞 その次の「山会」は四月四日に開かれた。三月三十一日付の左千夫宛子規書簡には「山会四月四日の事」とあって、この日に子規庵で

開かれる「山会」に出席するようにという案内であると認められる。四月四日のあとの「山会」は同月二十九日に行なわれている。この日の会について左千夫は三十日付の長塚節宛書簡の中で「昨日根岸の山会にて君が送った『タラ』の芽を喰ひ申候」と言っており、二十九日の会に彼が会員として参加したことは確実である。新しく入会したことを特にことわらない節宛書簡の書きぶりから見ても、三月七日か四月四日の「山会」から左千夫は出席するようになったと見られるのである。

光 続いて発表された写生文「四月廿九日」は「ホトトギス」四巻八号（明34・5）に載った。「ホトトギス」では本文の標題でも、目次でも、共に「四月廿四日」となっているが、この文章は一年前の明治三十三年の四月二十九日に子規が格堂を伴って突然左千夫の家を訪問した、その子規の突然の訪問の回想から始まっており、その訪問の日は子規の「亀戸まで」（「日本」明33・5・17）や「車上の春光」（「ホトトギス」明33・7）によって二十九日であることが確かで、左千夫の文章も本文の中では「廿九日」となっているので、「ホトトギス」の本文標題と目次の「四月廿四日」というのは誤植で、「四月廿九日」が正しい。

威 左千夫のこの写生文は「ホトトギス」の「募集一日記事（四月十日）」の課題がヒントになって、彼にとって生涯忘れることのできない、子規の来訪の日のことを綴ったものと考えられる。この文章は、亀戸天神の境内の様子や、牡丹園へ行く途中の船の中の乗客たちの会話などが詳しく書かれていて、写生が忠実に行なわれている。

貞 続いて左千夫が発表した写生文は「一夜旅」で、「日本附録週報」の

家に帰つて忽鯉の歌ができた。しかしまだあぶない。鯉の文章は多分よいだろふと思ふ。君もこれから必ず応募し給へ。

と「週報」の「課題鯉」のために写生文と歌を作ったことを知らせている。写生文の方は「多分よいだろふと思ふ」と自信をのぞかせているが、これは十六日に子規に見せたところ、かなりの評価を受けた結果と考えられる。十六日のことであろうか、「鯉」という文章を子規が批評し、直接に添削を加えたことが「ホトトギス」四巻七号（明34・4）の虚子の「消息」からわかる。この「消息」は、虚子が根岸庵を訪れて子規と話し合っているところへ左千夫もやってきたことを述べたあとで、

それより妹君の手料理にて晩飯を饗せられ、三人それを食ひ乍ら俳句の話し、歌の話し、文章の話し、に夜を更かし、殊に左千夫君の、菜の花の畑に川水溢れ、其中で鶏籠を伏せて鯉を取りしといふ、十年前の出来事を叙したる文章に就て子規君の批評添削あり兩人の辞したるは夜十時を過ぎ申候。

と記している。虚子の記しているとおり、写生文「鯉」は左千夫がまだ郷里の殿台にいた青年時代に、水の出た菜の花畑に跳び込んで鶏籠を伏せて鯉をとらえたときの模様を描いたもので、平易な口語文でいきいきと描写することに成功している。先に見た格堂宛左千夫書簡は、子規に見てもらったあとの左千夫の自信をのぞかせており、「日本附録週報」の課題に入選、掲載されたことから見て、子規から相当高い評価を受けたものと見てよいだろう。

なお、この虚子記「消息」は、ほかに子規の容態の悪化について述べ、この号から従来子規が行なっていた「ホトトギス」の募集句の選をやめることになり、募集文章の選も半分ほどは虚子がやり、そのあ

とを子規が選抜した旨を述べている。先に「草花日記」のところで確かめたように「ホトトギス」の募集文章の選は子規によって行なわれてきたが、そのことは本文にも目次にも明示されていなかった。ところが、このあとの四巻八号（明34・5）から目次に「虚子選」とはつきり示されるようになるのは、俳句だけでなく文章の方の選も子規がやめて、虚子がやるようになったことを示している。そんなわけで、左千夫の写生文のうちで「鯉」は子規から直接に批評、添削を受けた最後の作品ということになるらしい。

右のような経緯で子規は「ホトトギス」の写生文の選を明治三十四年四月発行の四巻七号でやめるのであるが、彼の主宰する写生文の研究会「山会」はその後も継続され、左千夫はこの年の春に入会したものと推測される。

このころの「山会」は毎月、第一木曜日に子規庵で開かれており、二月七日、三月七日、四月四日といった具合に行なわれているが、まづ二月七日を見てみると、二月の初めに出されたい高浜清宛子規書簡に、

来る七日夕刻より山会相催度御差支無之候哉 四、碧、鼠、傘諸子へは通知致置候 上根岸 規

とあって、二月の「山会」の案内を受けたのが、高浜虚子、坂本四方太（四）、河東碧梧桐（碧）、寒川鼠骨（鼠）、岡麓（傘）の五人で左千夫が含まれていないことがわかるし、先に触れた「根岸庵訪問の記」を見ても、二月七日の日には、左千夫は三日に訪問したばかりであるというので門前まで行きながら躊躇して引き返しており、子規に会ってはいない。左千夫は二月の「山会」には出席していないと見てよい。

ろを紹介すると

ふと考へてみるとまだ三日しか間がない 余りま近く重なるはよくあるまいかしらんと気がついたので。門前に躊躇しながら内をのぞいてみると。女の下駄が三足あるけれど内へ向いて並んでゐる よその人のらしくない 客もないと思ふたがまづ／＼今日はよるまいと決心した。

決心はしたもののさればと云つて未だなか／＼帰ると云ふ方に足はむかない。暫くたゞずんで内の様子を見ると云ふでもなく只ほんやりしてゐたのである。おつかさんの声もしない 妹さんの声もしない 先生のせきの声もきこえない。

威 のようになっており、本文の末尾に「是は赤木格堂が為に先生の病情（ママ）を見のまゝ記して送れるなり明治参拾四年二月十五日」という付記がある。赤木格堂は根岸短歌会の同人で、子規に俳句も学んだ。左千夫の「根岸庵訪問の記」は、同僚である格堂に宛てた私信の形をとつているが、内容から見て、発表の意図をもって、根岸庵を訪問しようとするときの心境、子規の病状、その談話等を一文にまとめたものであろう。

この文章について坂本四方太は、左千夫の没後に「アララギ」の「伊藤左千夫追悼号」（大2・11）に載せた「左千夫の文章」の中で

子規子が始めて伊藤君の文章を認めたのは何でも根岸庵を訪問する記事だつたと思ふ。玄関とか縁さきとかに女下駄が一足揃へてあるといふ句を子規子が大変賞められたことを覚えて居る。下駄を着目する左千夫の文章は中々あなどれないといふやうなことをいはれた。

と、子規が左千夫の文章の写生手法をはめたことを述べている。また、

この「アララギ」の「伊藤左千夫追悼号」には寒川鼠骨も「能く左千夫氏の如くなり得る者幾人ぞ」という文章を載せ、その中で子規が「根岸庵訪問の記」を「遠慮の心から自然に山が出来てゐて文章も物になつてゐるなあ。」と評した旨を記している。

ここで、子規が「遠慮の心から自然に山が出来てゐる」と批評したことについて考えてみると、左千夫の文章の中の、師の病状を心配するあまり、つい根岸庵の門前まで来てしまつて、寄ろうか寄るまいかと逡巡しつつ、ふと門の中を眺めると、女下駄が三足、上がりはなに並んでゐるのが目についたというところであると考えられ、先に引用した四方太のことばと、子規がこの文章をはめたということだけでなく、その箇所までも一致している。師の病状を憂え、訪問すべきか否かと迷う筆者の心情が流露したこの文章を子規が写生文として評価したことは事実であらう。とすると、左千夫の「根岸庵訪問の記」は子規に高く評価された最初の写生文ということになる。あとで触れるように、左千夫はこの年の春、三月か四月に、根岸系の俳人や歌人たちによる写生文の研究会の「山会」に入会したものと見られるが、この「山会」入会については、「根岸庵訪問の記」が写生文として評価されたことが関係していると考えられる。

「根岸庵訪問の記」（「俳星」明34・3）につづいて、翌月の四月二十二日の「日本附録週報」に「鯉」が載る。これは四月十六日締切の「課題鯉」に短歌と写生文の両方に応募したもので、二十二日の「週報」には短歌も一首入選している。締切日の翌日にあたる、四月十七日付の赤木格堂書簡を見ると、十六日に子規の家を訪れたことを報告したあとで、

が認められる。

というのは、先の「草花日記」が四百字詰の原稿用紙で一枚足らずの短いもので、趣味的な面が強く出ていたのに対して、こんどの「牛舎の日記」は、長さも五倍ほどになったし、内容も作者が家族の者や使用人たちに牛の病気や出産について適切な指示を与えて処置する様を描いており、その描写も

母牛のうしろ一間許はなれて。ばり板の上に犢はすはつてあて耳をふつてゐた。背のあたりに白斑二つ三つある赤毛のめす子である。母牛はしきりにふりかへつて犢の方を見ては鳴てゐる。

というように子牛のいる場所、形、色彩、動作などを視覚的にとらえており、写生の方法が正確に用いられている。

ここで左千夫の「牛舎の日記」が「草花日記」と比べて写生文として急速に進歩した理由について考えてみると、まず第一に、彼がこの日記を書く一か月ほど前に、「ホトトギス」四巻三号（明44・12）の「消息」に子規が

日記とは申せども之を人に示さんとする上は読む人をして面白く感ぜしむるやうに書かざるべからず。読者に面白く感ぜしむるは、自己の面白く感じた事とは必ずしも一致不致候。各人が最善く熟知し居る自己の職業に就いて多少趣味ある部分を拵んで書かば幾分の面白味は必ず可有之と存候。然るに多くの人は毎日の職業は自分に陳腐にして面白からぬため殆ど之を記さず。

と書いて、人に見せようとするこの募集日記に、自分の職業について、その仕事ぶりを記録することをすすめたことが影響していると考えられる。

この点は、右の「消息」中の子規の「貰つた、往つた、来た、立つ

たと『た』ばかり続く代り、貰ふ、往く、来る、立つとすれば語尾も変り且つ簡単に相成申候」という、文末に現在形を用いて変化をつけるようにという提唱を、左千夫の「牛舎の日記」が実行している趣が見て取れることと、この「消息」が載ったのが左千夫がこの日記を執筆する直前であることとを考え合わせると、その可能性が高いと考えられる。

それと、もう一つ気づくことは、「牛舎の日記」が香取秀真の「鑄物日記」にたいへん似ていることである。この日記は、先にも触れたように左千夫の「草花日記」と同じく「ホトトギス」四巻一号（明33・10）に載ったもので、十編中の最初に置かれており、翌月の「ホトトギス」に載った「募集日記明治廿三年十月十五日記事」の中で子規は、この「鑄物日記」について

これが今度の募集日記の第一等なり。面白く趣味ある材料の充実にしたる上に、書き方子供らしく真率にして技術家の無邪気なる処善くあらはれたり。

と賞賛している。香取秀真は根岸短歌会の同人で、先の「草花日記」の中にも「十三日 岡来る。共に香取を訪ふ。」と出ており、左千夫は子規に入門した最初のころから交際していた。その秀真が書いて、子規が「今度の募集日記の第一等」とほめた「鑄物日記」に左千夫が注目し、それから学んだということはじゅうぶん考えられることで、自分の仕事ぶりを飾らず客観的に描いた写生の手法や、日記に用いられた易しい口語文体は、共に秀真の「鑄物日記」から学んだものと見られる。

「牛舎の日記」に続いて左千夫が発表した写生文は「根岸庵訪問の日記」で、これは「俳星」二巻一号（明34・3）に載った。冒頭のとこ

一、事実ならぬ事を事実の如く記すべからざる事。(以下略)

という規定を掲げて日記文を募集したのに応募したもので、「ホトトギス」四巻一号には「募集日記」という標題で十編の日記が掲載されており、香取秀真の「鑄物日記」が初めて、左千夫の「草花日記」はその次に載せられている。この「募集日記」の選者が誰であるかは明示されていないけれども、「消息」欄を見ると、子規が「募集の日記も投稿非常に多く、之を閲するに三四日を費し、之を手入するに亦三四日を費し申候。」と記し、翌号の四巻二号(明33・11)に載せた「募集日記明治廿三年十月十五日記事」において、子規が「草花日記」などの募集日記応募原稿の手入れをする様子を書いていることから見て、「ホトトギス」の日記募集は子規が企画し、自分で選も行なったものと見られる。

左千夫の「草花日記」は、同時に「ホトトギス」に掲載された十編の日記の中で最も短い。香取秀真の「鑄物日記」は、鑄物工場の工場主として、経済的な工面をしながら、職工を督励して働いている技術者としての彼自身の生活を描いており、またある小学教師の「学校日記」は、毎日片道二里の道を歩いて通う分校の教師としての多忙な生活をかなり詳しく描き出しているといった具合に、左千夫以外の応募日記が長い文章で日々の生活を詳細に写しているのに対して、左千夫の「草花日記」は極めて簡単なもので、筆者の暮らしぶりはほとんど描かず、草花に関連した趣味的な面を記している。

ところで、子規には「雲の日記」というのがあって、これは「ホトトギス」二巻一号(明32・11)に発表された。それは

十七日 雲無く風無し。空霞み庭湿ふ。

十八日 雲無し。芭蕉しをれたり。

十九日 ありなし雲、檐の端にあり。

二十日 庭に落葉を焚く。風吹いてあぶなしといふ。障子をあげさせて見るに雲無し。

廿一日 真綿の如き雲あり。虚子来る。

といったもので、この「雲の日記」と「草花日記」と並べてみると、「雲」や「草花」という一つの主題にしぼって全体をまとめる着想と、極めて簡潔な文語文体という点で、両者に共通したものが認められる。これは、左千夫が募集日記を書くにあたって、出題者である子規が前年十一月に「ホトトギス」に発表した「雲の日記」を参考にした結果であると見られる。子規の「雲の日記」が対象としての雲の有無や、その形、ある場所などをできるだけ客観的に描こうとしているのに対して、左千夫の「草花日記」は草花そのものの様子を描くことを主眼とせず、表具屋に朝顔の掛軸の表装を頼んだり、絵師のところを訪れて蓮の絵を見たり、紫苑の花などを見ながら茶をたてるというような風流な暮らしを描くことを中心にしている。このように左千夫の日記は写生文というには程遠いものであったけれども、子規の強い影響のもとに書かれたということは言えるであろう。

左千夫が次に写生文を発表するのは翌年、明治三十四年の二月で、同じ「ホトトギス」の四巻五号に「牛舎の日記」を書いている。これは同誌四巻二号(明33・11)が「次号課題」欄で

▲第四巻第五号課題 明治廿四年一月廿五日締切

日記(一月十日より一月十六日迄七日間)

の規定で日記文を募集、前の「草花日記」の場合のように応募したもので、それから四か月しかたっていないにもかかわらず、相当の進歩

左千夫の初期写生文

——歌・俳の場——

貞 光 威

A Sketch Technique in Sachio's Early Writings

Takeshi Sadamitsu

伊藤左千夫は生涯に三千首を越す歌を作り、歌人として活躍したが、同時に彼は「千本松原」、「水籠」などの写生文や、「野菊の墓」、「分家」などの小説も執筆しており、散文の方面でも特色ある仕事をしている。

左千夫の写生文の執筆は、正岡子規が「ホトトギス」誌上に募った「日記」に応募したのが最初で、翌年から子規の主宰する写生文の研究会である「山会」に加わり、その執筆も本格化する。子規の没後も「山会」への出席をつづけた彼は、作品を「ホトトギス」等に発表してゆくが、やがて「山会」の中心で「ホトトギス」の編集発行人であった高浜虚子の激励や、「山会」に出され「ホトトギス」に載った夏目漱石の「吾輩は猫である」の好評などから小説にも関心を寄せ、「野菊の墓」以下の作品を「ホトトギス」を中心に発表してゆく。

このように左千夫の写生文・小説の執筆は、子規によって始められ、その没後は虚子らに受け継がれた「ホトトギス」同人らを主とする「山会」の写生文運動と深く結びついている。そこで、ここでは「山会」

との関係を中心にして、左千夫の写生文について見てゆくことにしたい。彼は「山会」とのかかわりの中で小説も書いているが、小説については稿を改めることにして、この論では写生文を中心に「山会」との関係を考察することにする。

左千夫が子規に入門するのは明治三十三年一月のことで、その年の十月三十日発行された「ホトトギス」四巻一号に彼の書いた「草花日記」が載る。それは

草花日記

本所 幸男

○九月十日 表具屋を呼びて是真筆朝顔の掛軸の表装仕直を命ず。

○十一日 萩見に行く。猶寒し。法恩寺は二分、萩寺は三分。

○十二日 小雨、稍寒し。台子を出し風爐に火を入る。花買ひに四目の花屋に行く。紫苑と女郎花とを扱ひて携へ帰る。茶を飲みながら兼題の歌、橋十首を作る。

(以下略)

といった具合に十六日の分まで続いている。これは「ホトトギス」三巻十号(明33・7)誌上に

日記募集

日記 九月十日より十六日迄七日間

右九月廿五日締切

注意

一、各日多少の記事あるべき事。

一、記事は、気象、公事、私事、見聞事項、又はそれに関する連想議論等凡て其日に起りたるものに限る事。